

月刊

みんなぱく

◎ 国立民族学博物館

2010

3

月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283
平成22年3月1日発行 第34巻第3号通巻第390号



特集◎

ふたつの 「みんなぱく」

—武蔵野から千里へ—

聖なる山から来た娘

こぼやし なおゆき
小林 尚礼

- 1 エッセイ 世界へ●世界から
聖なる山から来た娘
小林 尚礼

- 2 特集
ふたつの「みんぱく」
—武蔵野から千里へ—

みんぱく創設の系譜—渋沢敬三の遺言
…… 須藤 健一
民族学博物館のアイヌ住家
…… 宮本 瑞夫
あれから七〇年
…… 近藤 雅樹
民族学博物館と渋沢敬三・高橋文太郎
地域の歴史を後世につなぐ
…… 高田 賢
夢の博物館
…… 渋沢 雅英

- 8 モノグラフ
みんぱくで「水」を探す

企画展「水の器—手のひらから地球まで」の裏側
田口 理恵

- 10 地球ミュージアム紀行
ウミスタ文化センター

先住民文化の「フォーラムとしての博物館」
吉田 憲司

- 11 表紙モノ語り
高野山のしゃもじ

中牧 弘允

- 12 みんぱくインフォメーション

- 14 万国 津々浦々
パイワン族の竹占

野林 厚志

- 15 時論 新論 理想論
ラテンアメリカの文書主義

齋藤 晃

- 16 多文化をささえる人びと
自助組織としての自立をめざして

NGOベトナム in KOBE
北山 夏季

- 18 生きもの博物誌
羊たちのいるイタリアの風景〈ヒツジ〉

宇田川 妙子

- 20 歳時世相編
ノウルーズ

イランの新年
山中 由里子

- 22 フィールドで考える
「いのち」が育まれる場所

岩佐 光広

- 24 みんぱくウィークエンドサロン
研究者と話そう

次号予告・編集後記

そのチベット人の娘は、二〇〇八年三月、成田空港へ降りた。日に焼けた顔としなやかな体の周りに、山の風が吹いているようだった。彼女は、東チベットの聖山カワカブ（梅里雪山）からやって来た。山麓の村に暮らす彼女の父とわたしは一〇年来の友人で、そこに応援者があらわれて彼女の留学が実現したのだ。アジアの若者の日本留学には、多くの面倒な手続きが要求される。さらに来日直前、チベット自治区のラサで騒乱が起こり、チベット人の移動が制限されようとしていた。それらをすべて乗り越えて彼女はやって来た。カワカブとわたしのかかわりは、一九年前に起こった日中合同登山隊の遭難に始まる。一九九八年からは、友人を含む一七人の遺体捜索のため、山麓の村へ通い始めた。その過程でチベット人がカワ

カブを神の山として信仰していることを知り、聖山とは生命の源ではないかと思うようになった。聖山に登ろうとした山岳会の一員であるわたしに、村人の誰もが快く接するわけではなかった。そんななかでわたしたちの活動を理解し、協力してくれたのが村長でもある彼女の父親だった。

中国の奥地からいきなり東京へ来た彼女は、さまざまな問題に直面した。言葉や食べ物、そして何よりも都会の人間関係に次第に疲れていった。泣いて過ごす夜も少なくなかったらしい。しかし音をあげなかった。いつしか刺身は好きになり、馴染めないことにも折りあいつけていった。チベット人、特にカムパとよばれる東チベットの人びとは、むかしから巡礼や交易のために広く移動していたので、異なる環境への適応力があるよう

だ。二年間で彼女の日本語はすっかり上達した。チベット語には多くの方言があるが、カワカブ周辺の言葉と日本語を行き来できる人は、ほとんどいないだろう。近い将来彼女の協力をえて、カワカブの神話の翻訳や、村の老人への聞きとり調査をしたいと密かに考えている。

二年間の留学予定だったが、一年たつころに彼女は日本の大学へ行きたいと言いはじめた。簡単な道のりではないが、わたしたちは応援することにした。二〇一〇年の二月、彼女は大学入学にむけて受験勉強をしている。桜が咲くころには結果が出るだろう。夢破れて故郷へ帰るのか、あと四年日本の大学で勉強するのかまだわからない。できる限りのことはやったので、どちらになっても結果を受けいれよう。四月には、カワカブとわたしの関係は新しい段階にうつる。

1969年生まれ。チベットやヒマラヤで、人間の背後にある自然をテーマに撮影活動する。著書に『梅里雪山 十七人の友を探して』、『季刊民族学』最新号(131号)に聖山カワカブ巡礼の記事を掲載。毎日新聞で写真「モンスーンの恵み」を連載中(隔週月曜)。学生時は京都大学山岳部で日本中の山を登った。同大学院工学研究科衛生工学専攻修了。ホームページ: <http://www.k2.dion.ne.jp/~bako/>

ふたつの「みんぱく」

— 武蔵野から

千里へ —

青雲の志に燃えて、
アチック・ミュージゼアムを開いた渋沢敬三。

長じて、彼は、私財を抛出、高橋文太郎らとはからって、
武蔵保谷の地に、野外博物館「スカンセン」の
日本版建設を夢見た。

渋沢は、常に現実を見きわめて対処した、
稀有なりアリストだった。

「夢」の実現をめざし、

自己の信念に忠実な、心優しいロマンチストでもあった。
今も、多くの人たちに敬慕されている。

そして、七〇年前の「夢」を
今によみがえらせようと、

多くの人たちが
参集した

1960年2月 民族学博物館内にて、仲間と
語らう渋沢敬三(左端)(渋沢史料館所蔵)



2009年11月8日 銘板除幕式につどう関係者たち
(提供・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会)



渋沢雅英氏と高橋文彦氏による除幕
(撮影・太田心平)

姿をあらわした銘板(撮影・太田心平)

みんぱく創設の系譜 — 渋沢敬三の遺言



須藤 健一
国立民族学博物館長

館長就任一年、オセアニアの海外移住や民主主義の研究をしてきたが、最近では日本の外国人受け入れと日本社会の多文化・多元化についての関心が強い。

みんぱくの日本の文化展示には、
運搬具や農具、はきもの・かぶりもの
などが所せましと並んでいる。な



高橋文太郎さんが研究したわかんじき(日本の文化展示)



重要文化財のおしらすま(複製)(日本の文化展示)

白鳥庫子さんから学会
幹部と皇紀二千六百年
記念事業として
「日本民族博物館設
立建議案」を文部大
臣に提示した。しか
し、日中戦争に奔走
していた国を相手に、
その実現は無理と判
断した渋沢さんは、
アチック同人の高橋

われの大きな責任である。

かには国指定重要有形民俗文化財もある。みんぱくが創設された一九七四(昭和四九)年の所蔵標本資料は三万点弱。そのほとんどは、アチック・ミュージゼアムが玩具研究と、本格的な民具研究にのりだした昭和のはじめから集めてきた日本の農山漁村の民俗資料である。

●日本の民族学の育ての親

このアチック・ミュージゼアムの創設者である渋沢敬三さんは、一九二一年に郷土玩具の研究をはじめ、翌年から三年余は銀行員としてロンドンに滞在した。その間、ヨーロッパ各地の美術館や博物館を見て回り、スウェーデンのスカンセン野外博物

●民族学博物館の建設へ

館には感激したという。生活用具を民家ごと展示し、人びとの生活をリアルに表現していたからである。帰国後、渋沢さんは勤務のかたわら日本各地へ調査旅行に出かけ、同時に共同研究を組織して多くの民俗学者を支えた。自宅車庫の屋根裏(アチック)は博物館(ミュージゼアム)にした。そして、一九三四年の日本民族学会の設立にかかわり、三七年には日本民族学会附属研究所を開設した。渋沢さんは、独自の常民文化の学風を形成するとともに、多数の研究者や学会活動を支援した。まさに日本の民族学・人類学の育ての親とされる所以である。

これは国立でつくるべきだ」と創設運動にとりかかる。一九三六年、

●みんぱくのこれから

渋沢敬三さんのご子息、雅英さんはみんぱくを訪れた際に、梅棹忠夫初代館長から「渋沢敬三先生の遺言が現在のみんぱくになった」といわれたという。梅棹さんは、自分自身を「みんぱく創設までのながいレールのなかの中間走者の一人」と語っている。

1950年3月、民族学博物館構内に、二谷国松氏らによってアイヌ住家が建築された。これは、その折の工程記録の一部

民族学博物館 スライド 101

昭和27.9.25.

アイヌ 住家の建築

製作：宮本啓太郎



民族学博物館の アイヌ住家



みやもと けいすけ
宮本 啓太郎
財団法人宮本記念財団理事長

専攻は日本近世文学・日本民俗学。現在の関心事は、渋沢敬三・宮本馨太郎などアチック関係フィルム再生・活用・公開。おもな編著書は『説話文学史』（明治書院）など。

このことは、日本初といってもいいこの本格的オープン・フィールド・ミュージアムに対する、その道の専門家の関心の高さを示しているといえよう。

●野外博物館の構想

一九五四（昭和二九）年五月八日、文部省文化財保護委員会記念物課の一行十名が、春季ピクニックと称して、保谷の民族学博物館のアイヌ園を訪問している。すでに、このアイヌ園については、完成間もない一九五二（昭和二七）年九月、浦谷記念物課長の視察もおこなわれており、

もともと民族学博物館を建設するに当たって、保谷の地が選ばれたことになったのは、当初から、渋沢敬三先生に、日本各地および周囲諸民族の住家・野外建造物、民俗植物園を含む一大民族学博物館の構想があつて、実現したものであるといわれている。

その後、民族学博物館は、渋沢先生の手を離れ、日本民族学協会に引



終

民族学博物館スライド
No. 101

継がれたが、第二次大戦、戦後の農地解放問題などで野外博物館構想は延引し、漸く一九四八（昭和二三）年末、東京都農地委員会の理解ある処置と文部省の援助をえて、ここに当初の計画を実現出来る運びとなつたのである。

早速、翌四九年一月、日本民族学協会の企画委員会で、アイヌ住家の建設が決定し、建設委員、同監事が

委嘱された。委員には、金田一京助・今和次郎・渋沢敬三・宮本馨太郎などの諸氏が、また同監事には、唐木栄一郎氏が委嘱され、建設準備に取り掛かることになった。結局、実際の実務は、アチック・ミュージアム以来関わってきた父・宮本馨太郎と唐木氏が当たることになった。

父・馨太郎は、一九三七（昭和一

二）年、アチックの収蔵民具が保谷に移管されると保谷の民族学研究所の研究員となり、後には博物館主任となり、収蔵民具の台帳作成に当たり、戦後は、敷地や建物の管理などにも当たることになった。父の気持ちとしては、一途に、渋沢先生への責任を果たすということであつたようだ。

●アイヌ住家の建設

建築は、当時の日高国沙流郡平取村二風谷に在住の二谷国松（六三歳）・一太郎（五八歳）・善之助（五三歳）の三兄弟に依頼し、栗・唐松・茅など主要材料は、輸送の関係から、山梨・長野などで調達することになった。

家造り（chisekar）の仕事は、一九五〇（昭和二五）年三月一日に地鎮祭（chise-kote-inomotak）、一八日には、十数名の人夫を動員して古式通りの屋根上げ（chise-puni）をおこない、母屋（chise-pani）を、熊檻（heper-se）・祭壇（inaw-san）倉庫（pu）・男廁（okkavo-

ri）・女廁（menoko-ri）の順に建設され、二五日、予定通り新築落成の式（chise-nomi）が執りおこなわれた。当時、既に北海道でもおこなわれることになつたアイヌ住家の本格的建築が東京でおこなわれたということは、画期的な試みとして、記憶に止められてしるべきであろう。

あれから七〇年



こんどう まさき
近藤 雅樹
民博 民族文化研究部

イラストレーター、兵庫県立歴史博物館学芸員などの経歴がある。わたしの「夢」は、みんなばくで渋沢敬三没後五〇周年記念の特別展を実現し、退職したら「日曜画家」になること。

西武池袋線の保谷駅に降り立ったのは、昨年一月八日、日曜日の朝だった。日本最初の野外博物館があつた場所に、市民有志の会が設置した銘板の除幕式が催される。この博物館を「日本民族学会附属民族学博物館」といった。

須藤健一館長と同僚の太田心平助教は、すでに到着していた。坂口光治西東京市長、高橋文彦氏、宮

本瑞夫氏らの姿もあつた。

高橋家の歴代は、武蔵野鉄道（現在の西武鉄道）に取締役として重きをなした。文彦氏の父君文太郎も、一九三六年に重役に就任、明治大学を卒業したばかりの若さだった。

瑞夫氏の父君馨太郎は、戦時下に博物館の維持に尽力し、国立民族学博物館の礎となつた資料（アチック・ミュージアムのコレクションなど）を守り抜き、戦後の文化財保護行政に重要な役割を担われた。

渋沢家の方たちが到着し、除幕式が始まった。敬三の長男渋沢雅英氏、坂口市長、須藤館長の祝辞に続き、国立民族学博物館の初代館長梅村忠夫氏から寄せられた長文の祝電が披露された後、雅英・文彦両氏によつ

て幕に懸けた紅白の綱が解かれると、美しい銘板が姿をあらわした。

式典は、この銘板が有志の会から市に寄付されることを謳って滞りなく終了。保谷駅前の市立図書館・公民館に移動した

一同は、そこで写真展「民族学博物館と渋沢敬三・高橋文太郎」かつて保谷にあつた民族学博物館を見学。一九三九年五月の公開以来、一九六二年秋に閉館するまでの四半世紀をモノクロ写真で回顧した。

このとき、わたしは「渋沢敬三と民族学博物館」と題して講演する榮に浴した。会場には、岡正雄の薫陶を受けられたヨーゼフ・クライナー博士の姿もあつた。奇しくも、この日は、敬三の祖父渋沢栄一の命日だった。



博物館の本館内部。当時掛けあつた看板も、最近みつかった（みんなく所蔵）（背景の写真は、西東京市中央図書館所蔵）

最初に移築展示された武蔵野の民家（写真は西東京市中央図書館所蔵）



民族学博物館と 渋沢敬三・高橋文太郎 地域の歴史を後世につなぐ



たかた まさる
高橋文太郎の軌跡を学ぶ会(西
東京市)代表

西東京市下保谷に生まれ、現在まで住む。若年のころより柳田国男や民俗学に関心をもち続ける。この数年は本会の充実・運営に力を注ぐ。

西東京市の旧下保谷にかつて在った民族学博物館やその創設に力を尽くした渋沢敬三や高橋文太郎のことは、地元の旧住民でさえ忘れかけていた。まして新住民は知る由もない。



100点近く並べた民具展。手前は藍染めの実演(撮影・高橋俊郎)



パネル写真展の準備。87点の写真に観客盛況(撮影・亀田直美)



2008年公刊の冊子(全128頁)。写真資料多数

今から半世紀以上も前のことであり、今はその痕跡のかけらも残っていないばかりでなく、事実についての資料も乏しいからである。

●勉強会の蓄積と冊子の刊行

このことを深く憂慮する市民有志が、せめてその実情を明らかにしたいという願いから勉強会を始めた。二〇〇七年春のことである。文献を集めて整理し、写真を探し、当時かわった方々に話を聞くなどの手立てをつくして資料を作り、会で報告した。また広く市民に知っていただくため、専門家の講演会を開いた。かくして、ある程度勉強会の成果が

あがってきたので、冊子にまとめようということになり、会員がポケットマネーを出し合って、二〇〇八年六月には『高橋文太郎の真実と民族学博物館——』を刊行することができた。マスメディアなどの報道も追い風となったのか、増刷するほど好評を博した。地元の方々のみならず、専門家や研究者にも多少評価されたとするならば、会員の労苦や努力が幾分か報われたといえよう。

●四事業の実施

会としてこれに満足することなく、二〇〇九年は民族学博物館開館七〇年にあたるこの機会に、渋沢敬三たちが目指した夢や精神をたとえ片鱗なりとも生かせる事業をと計画し、秋に実施することにした。すなわち、(一)より広く世間・市民に民族学博物館や渋沢たちの遺

したものを知らせる(二)単なるデスクワークでなく、館外においてこれを生かす実践をする(三)後世に伝え残す手立てをとる、という意図をもって、①博物館跡地に発祥の地を記念する銘板を建てる ②講演会を開く ③写真展を催す ④農具の展示・実演会をする、という事業である(②③④は二〇〇九年東京都文化財ウィーク企画事業として本市教育委員会と共催。また、銘板と写真パネルは終了後市へ寄贈)。

荷が重い試みであり、経費、労力、スタッフなどから実施を危ぶむ声もあつたけれど、多少の無理は承知のうえ、チャンスを選ばずということの実施に踏み切った。

その結果の客観的な評価は外部に委ねなければならぬにしても、銘板除幕式には、渋沢敬三氏のご遺族、国立民族学博物館の須藤健一館長、西東京市長など三四名の来賓のご臨席をいただき、滞りなく執りおこなうことができた。

また講演会は、国立民族学博物館の近藤雅樹教授に「渋沢敬三と民族学博物館」、東京学芸大学石井正己教授に「高橋文太郎著『武蔵保谷村郷土資料』の意義」の題で、感銘深いお話をいただいた。写真展・民具展示会も盛会であつた。多くの方々のご支援の賜物と深く感謝しているところである。

夢の博物館



しぶさわ まさひで
財団法人渋沢栄一記念財団理事長

現在、敬三の没後五〇周年忌(二〇一三年)にむけて、特別展示や国際シンポジウム、書籍の出版など、記念となる催しの企画をすすめている。おもな書籍に『父・渋沢敬三』(美業の日本社)など。

だいが前のことになりましたが、保谷の町に、わずかに残っていた戦前の博物館の建物の一室で、財団法人民族学振興会の理事会がおこなわれました。終わるころにはとつぷりと暗くなっていましたから、秋の終わりか冬の初めだったのだと思います。理事長の中根千枝先生と一緒には、帰りの電車のなかで、生前の渋沢敬三の思い出や逸話の数々を話し合うなかで、いずれは振興会を解散し、公益信託に移行したいというお話がありました。

やがてそれが実現し、平成一一年には最後の資産が売却され、高橋文太郎氏や敬三が、若いころ思い描いていた、北歐式の野外民族博物館の夢も消えてゆきました。ところが最近になって、西東京市の「高橋文太郎の軌跡を学ぶ会」の皆様から、「民族学博物館跡地銘板除幕式」へのお招きを受け、一月八日、参加させていただきました。国立民族学博物館の須藤健一館長、近藤雅樹教授も来会され、記念すべき会となりました。

*

生前の渋沢敬三は、博物館はもとより学術資料の収集、整理、編纂に強い関心をもっておりました。祖父栄一の没後、その業績の顕彰が話題となったときも、敬三は栄一の人生のすべてを網羅する資料集の編纂と、栄一とその時代の日本人の生活の姿を伝える「実業史博物館」の創設を提案しました。戦局が緊迫するなかで、将来の博物館で展示すべき資料を懸命に収集し、平和の来る日をひたすらまわっていました。

仕事の合間には、自分でも魚名の研究や、『延喜式』に見られる水産物の流通などについて研究し、「延喜式博物館」を作りたいと言いつつ出したのを、まだ高校生だったわたしも感動をもって聞いたことを覚えています。

*

これら多くの夢の実現を妨げたのは戦争でした。占領軍の政策で自分自身も財政的な基盤を失い、戦前から手がけてきた多くの企画が続行できなくなりました。「ニコ没(ニコニコして没落してゆく)」と称して、私生活の上ではそれをほとんど気に懸けることなく、学問の復興を願って、病魔に冒される晩年まで研究活動を続けていました。

しかし六七歳という早すぎる死を迎えた時点では、多くの仕事が未完のまま残されていました。本人は苦情めいたことは決して言いませんでしたが、心残りも多かったと思います。

早いもので、近く没後五〇年を迎えますが、その間驚くほど多くの人の願いが、次々と芽を吹きはじめました。保谷に収蔵された民具のすべては国立民族学博物館に継承されました。詳細な分析がおこなわれています。『渋沢栄一伝記資料』六八巻もほぼ完全にデータベース化され、実業史

1933年11月 アチック・ミュージアムの談話室にて。前列左から2人目折口信夫、3人目早川孝太郎、後列左から4人目渋沢敬三、5人目高橋文太郎、6人目宮本勢助(渋沢史料館所蔵)



博物館のために集めた資料は国文学研究資料館によってすべて整理され、画像化もされて、近代化のモデルとして世界中で展示されています。保谷の立派な銘板を拝見しながら、当時若かった方々の夢の数々が、戦争の苦しみを超えて、いつのまにか見事に蘇ったことを、嬉しく思った次第です。

みんなばくで「水」を探す

企画展「水の器——手のひらから地球まで」の裏側

三月二十五日（木）から企画展「水の器——手のひらから地球まで」が始まる。六月二日（火）までの約三カ月間、音楽、言語展示の奥にある展示スペースに、民博収蔵の水に関わる生活道具類のほか、日本各地の水のペットボトル約一八〇銘柄と、三七カ国から集められた二〇〇以上の銘柄のペットボトルなどを並べる予定である。

「水」の展示

「水の器」展は、人間文化研究機構・連携研究「湿润アジアにおける「人と水」の統合的研究」（代表 秋道智彌）の研究成果の一つとして実施するもので、民博所蔵資料と総合地球環境学研究所による水の研究をもとに、水の問題を紹介しようという企画した。

今回の展示では、飲み水の入れ物を「水の器」と呼び、「器」の字形に見立てて（図）、展示内容を四つのコーナーに分け、水と人の多様な



水甕から掬った水を飲む少年（撮影・梅棹忠夫、1957～1958年、民博所蔵の第一次大阪市立大学東南アジア学術調査隊写真資料から）

関わりを考えてみた。まず「一、生活世界の身近な器」では、民博資料から選んだ水の器を、手元から水源へと遡るかたちで並べ、生活世界内の水の道程を紹介する。「二、多様な水源」では、水源の先にある世界へと目を向けた。「三、水の器・地球」は、水源を形成する仕組みや水

資源の世界分布とともに、物理化学的に見た水の特性を紹介するコーナーである。最後のコーナーが「四、水のペットボトル」で、この新しい水の器の意義やそれに伴う生活文化の諸変化などを取り上げた。手にした一杯の水から水源へと遡り、さらに水源に水をもたらす地球のメカニ

ズムへ、そして手元の水へと戻ってくるように、水の道程に沿って四つのコーナーをつなげている。

みんなばくで「水」を探す

第一コーナーのために、収蔵品の中から「水の器」を選び出す作業が、なかなかやっかいだった。民博が所蔵する生活道具類約二十七万点から、水に関係する道具類を探すにしても、収蔵資料のデータベースで「水」と検索すれば済むというわけではない。館内専用のデータベースには、資料一点ごとに標本番号、標本名、使用地、寸法、材質、収集者、用途・使用法などが記されている。例えば、次ページに載せたイギリスのやかんの場合、標本名は「やかん（加熱器付き）」、材質欄には「鉄銅木布塗料・絵具・印刷インク・その他の着色材料」と書かれており、「水」で検索しても、この資料はひっかかりにくい。標本名も、「柄杓、杓子、椀、カップ、コップ、壺、甕、樽、筒

たぐちりえ
田口理恵

東海大学海洋学部 准教授

専門は文化人類学。モノ研究の可能性を探る機会として、本稿で紹介した連続展示に取り組んできた。この連続展示は、地球研・生態史プロジェクト以来の仲間と作り上げてきた。

鉢、皿、やかん、水差し、水すくい、水入れ、容器」など、「水の器」は容器の形態を示すさまざまな用語で登録されている。用途・使用方法の表現も、「水」に関連した動詞で言えば「汲む、運ぶ、揚げる、ためる、掬う、飲む、注ぐ、次ぐ、垂らす、売る、漉す、供える」など水を目的語とする用語や、「洗う、清める、遊ぶ、火を消す」など、用途と

しての水を表現する用語がある。結局、さまざまな用語を組み合わせた結果、水に関係する道具類の数は四〇〇〇点余り。これら道具類も、実際に利用されている現場を見れば一目瞭然なのだが、水気をさらう収蔵庫の中

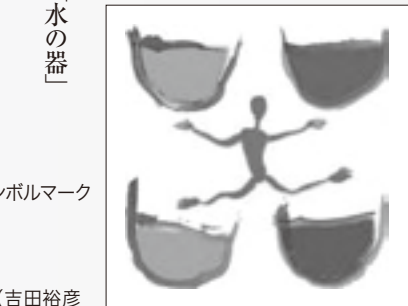


図 「水の器」展のシンボルマーク

ルース・アラライアンスと水の器

今回の展示は、実行委員長 および実行委員に名を連ねる機構外メンバーにとつて、「ルース・アラライアンス」と呼んで取り組んできた連続展示の一つとなる。連続展示の第一弾が「モチゴメの国ラオス——メコン河流域の暮らし」（二〇〇七年一月一七日～二〇〇八年一月七日、天理大学附属天理参考館）で、附属博物館開館特別展



イギリスのやかん

「川内川——川と人のくらし」（二〇〇八年一月二五日～二〇〇九年四月三〇日、鹿児島純心女子大学附属博物館）、天理ギャラリー第一三六回展「モンスーンアジアの竹文化——素朴な

水の器の種類	器の種類
(1) 飲水のための器	コップ、グラス、杓子、柄杓、水甕、水差し、やかん、水筒など
(2) 農牧、灌漑、漁撈など生業に関わる器	じょうろ、たらい、水桶、灌漑用ポンプ、あか汲みなど
(3) 調理のために食材を洗う、煮る、蒸すための器	鍋、釜、甕、壺など
(4) 衛生のための「洗う」器	洗面器、水浴・沐浴用の様々な器
(5) 水を介して何かを鑑賞する器	金魚鉢や花瓶など
(6) 水を介した嗜好の器	茶道具の椀や建水、書道用具、水パイプなど
(7) 水を介して何かを製造するための器	製紙、染め物、豆腐、酒など
(8) 水そのものを遊ぶ器	水鉄砲、水笛、水琴窟など
(9) 水と対になる消火の器	防火水槽、バケツなど
(10) 儀礼にて「供える」「清める」といった水のシンボル作用と結びついた器	聖水や神水入れなど

技術と造形の美——」（二〇〇九年二月一六日～三月二八日、天理ギャラリー）を実現させてきた。今回の展示も、その仲間たちと企画内容を議論し準備を進めてきた。約四〇〇〇点のリストをもとに、器を水との関わりから一〇のグループに分類（表）。さらに、水を飲むという根源的な関係にこだわることや、「水の道程」を「汲む」「運ぶ」「注ぐ」「掬う」ための器で示すなどの展示コンセプトを議論しつつ、展示候補を絞り込んでいった。会期と展示資料がまず決まり、展示資料に物語を肉付けしていったモ

チゴメ展やタケ展に対して、「水の器」の場合、構想自体は二年も前からあったのに、会期予定も展示資料もなかなか確定しないままに準備を進めるといった具合だった。連続展示といっても、展示を作り上げるプロセスは主催館によって異なり、この経験はかなり興味深いものだった。博物館が所蔵する文化資源の共同利用や展示による機関連携のあり方を模索する機会と捉え、この連続展示に取り組んできたが、その意義をより明確にするためにも、これまでの試行錯誤のプロセスを検証していくことが必要だと考えている。



カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州のウミスタ文化センター/U'mista Cultural Centre

先住民文化の「フォーラムとしての博物館」

カナダの北西海岸、クワクワカワクウ(クワキウトル)の人びとのコミュニティのひとつ、アラート・ベイを訪ねた。この地に、ウミスタ文化センターという小さな文化施設がある。巨大博物館に収蔵されていたクワクワカワクウの「文化遺産の返還」を実現し、その遺産の保存と継承を目的に設立された、コミュニティ・ミュージアムである

政府が奪った地域の伝統儀式

一九二二年、この地の首長、ダン・クランマーは、史上最大規模のポトラッチを主催した。ポトラッチとは、周知のように、出産、結婚、葬儀あるいは首長位への就任といった、人の生涯の節目の機会に踊りの会を催し、その場で家族が所有する財産を披露するとともに、莫大な贈り物を会衆にふるまうという儀式である。

当時のカナダ政府は、ポトラッチを、富を浪費するだけの「野蛮」な風習として、これを取り締まるうとしていた。ダン・クランマーは逮捕され、釈放と引き換えに、その儀式で用いたすべての財産を政府に譲り渡すことを強いられた。こうして、仮面や彫刻、毛布など、クワクワカワクウの貴重な文化遺産が政府の手に渡り、オタワのヴェイクトリア記念博物館(後の国立人類博物館、現在のカナダ文明博物館)やトロントのロイヤル・オンタリオ博物館におさめられることになった。

蘇る儀式と息つくコミュニティ

クランマーの娘のグロリア・ウエブスターをはじめアラート・ベイの

必要があればあらたに作り直すというの、これまでの慣習であった。しかし、先に名前を挙げたグロリア・ウエブスターによれば、近年では、作家としてその名が記憶される人物もみられるようになり、また博物館や美術館の存在も身近なものになって、人びとの考えも徐々に変わってきているという。今回のワークショップも、そうした動きを受けて、先住民の考えに合致する保存のあり方を探る目的で開催された。博物館と、その展示や収集の対象と



ウミスタ文化センター アラート・ベイ ブリティッシュ・コロンビア州 カナダ (以下写真はいずれも、2009年10月撮影)

人びとは、一九七〇年代から、接収された文化遺産の返還運動を根強く展開し、一九九〇年ついに返還を実現して、返還された文化遺産の収蔵施設としてウミスタ文化センターを設立した。返還された仮面や彫像はすでに使用に耐えるものではなくなっていた。しかし、このあいだに人びとは自分たちの手で仮面を彫り、毛布を編んで、見事に儀式を復活させている。

ウミスタ文化センターは、現在アラート・ベイのコミュニティのメンバーによって運営されているが、文化遺産の収蔵・展示のための機関というだけでなく、言語教育プログラムや文化伝承のプログラムの実践を

なる文化の担い手が集い、議論を重ねるなかで、ともにわずかずでも互いが変わっていく。「フォーラム



ウミスタ文化センターで開催されたトーテム・ポールの保存に関するワークショップ



アラート・ベイの墓地に立つトーテム・ポール



ビッグ・ハウスの内部。ポトラッチはこの場で催される

よしだ けんじ
吉田 憲司
民博文化資源研究センター

アフリカを中心に、仮面や儀式、キリスト教の動向についてフィールドワークを続ける一方、ミュージアム(博物館・美術館)における文化の表象のあり方を実践的に追求している。



通じて、文字通りの地元の「文化のセンター」として機能している。

展示する側とされる側が集う場所

わたしが訪問した際も、カナダ保存研究所(CCI)との共催で、トーテム・ポールの保存のあり方について、保存科学の専門家と、地元に住むトーテム・ポールの制作に携わるアーティストを交えたワークショップが実施されていた。トーテム・ポールは、ひとたび立てられれば、とくに修理や再着色をおこなうことはなく、朽ちるままにおかれる。

としての博物館」のひとつのあり方が、今、このウミスタ文化センターのなかで実現している。

表紙モノ語り

高野山のしゃもじ

地域：日本 和歌山県 1975年受入
標本番号：H0014229

●
なかまき ひろちか
中牧 弘允

民博 民族文化研究部

専攻は宗教人類学、経営人類学。日本の宗教を国内外で追求めてきたが、高野山では会社供養塔の研究に従事したことがある。

しゃもじはご飯をすくう食事の道具である。しゃくしともいうが、地方によつて呼び方は異なり、その区別は曖昧である。

洪沢敬三のアチック・ミュージアムの収集品に高野山の「朱塗杓文字」がある。一九二七（昭和二）年に高野山から深井五郎が洪沢宛に郵送していることがわかる貴重な資料である。三銭の切手を貼り、そのまま投函している。また、その状態で保管しているのも、情報としてはおもしろい。

高野山の宿坊に泊まると、いまでもしゃもじがお土産として提供される。朱塗りの贅沢品ではなく、白木のままのしいものではあるが。

高野山としゃもじの関係を解くカギは安芸の宮島にある。宮島のしゃもじ

は木製では全国七〇パーセントのシェアを占めるといわれている。お土産としても紅葉饅頭とならぶ人気をほこっている。

宮島のしゃもじは寛政のころ、修行僧が弁天の琵琶に形が似ているところから、厳島神社の参拝記念につく

るよう島民にすすめたと伝えられている。それは、祭神である三柱の女神のうち、市杵島姫命いちきしまひめのみことが弁天とみなされていることにも由来する。

しゃもじは主婦権の象徴だけでなく、古来、霊力のある呪物や縁起物として特別扱いされてきた。米とつながる五穀豊穡や商売繁盛、飯取る⇨召取るから派生した必勝祈願、すくうから生じ



た救済機能など、意外と多様性に富む。戸口にさして魔よけとしたり、自在かぎに結んで火伏せとしたりもした。また遊客を招いたり、魂を呼び戻したりする習俗もあった。新宗教の大本では御手代みてしろとして出口王仁三郎でしげの手の代役をつとめたこともある。高野山のしゃもじも日用品であると同時に、霊力のやどった呪物にほかならないのである。

企画展

「水の器—手のひらから地球まで」

生命の根源、水。民博所蔵の様々な器やペットボトルから地球規模まで、器を通して人と水の問題を幅広く考えます。
会期 三月二十五日(木)～六月二十二日(火)
会場 常設展示場内

春のみんなくフォーラム
「2010年西アジア再発見」

大村次郷写真展
「西アジア、祈りの風景」
会期 三月三〇日(火)まで
場所 本館一階エントランス
観覧料 無料

「じゅうたんをつくる」
「じゅうたんを織る」
実施日 三月二七日(土)まで
の火・木・土・日・祝日
時間 一時～二時

「伊勢の染型紙—映像と実物にみる匠の技—」
江戸時代に流行した小紋染めには、おもに伊勢で作られた伊勢型紙が使われていました。映像資料とともに型紙を展示し、伝統の技を紹介いたします。
会期 三月二十五日(木)～六月二十九日(火)
会場 常設展示場内

※参加無料。申込不要。
絵本読み聞かせ
「絵本で旅する詩の国イラン」
実施日 三月二〇日(土)、二二日(日)
時間 一時～二時

「アラブ・アンダルシア宮廷音楽の響り—モロッコの花—」
「ミナ・アラウィの典雅な歌声」
実施日 三月二日(月)・振休
時間 一時三十分～二時
(開場 一時)
会場 講堂
※参加無料。要申込。
申し込み締切り
三月四日(木)必着
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話 〇六・六八七八八二二〇
(平日九時～一七時)

研究公演
「アラブ・アンダルシア宮廷音楽の響り—モロッコの花—」
「ミナ・アラウィの典雅な歌声」
実施日 三月二日(月)・振休
時間 一時三十分～二時
(開場 一時)
会場 講堂
※参加無料。要申込。
申し込み締切り
三月四日(木)必着
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話 〇六・六八七八八二二〇
(平日九時～一七時)

「映像に身するイスラームの風情」
「若手人類学者の民族誌映画」
上映会
実施日 三月七日(日)
時間 一〇時五十分～一六時
四〇分(開場一〇時三〇分)
会場 第五セミナー室
※参加無料。申込不要。
お問い合わせ
研究協力課研究協力係

電話 〇六・六八七八八二二〇九
(平日九時～一七時)
国際シンポジウム
「フェアトレード・ミニマーケット」
「シヨウ・商品が運ぶ物語」
実施日 三月二日(火)
時間 一〇時三十分～一七時
四十分(開場 一〇時)
会場 講堂
※参加無料。申込不要。
お問い合わせ
鈴木 紀研究室
電話 〇六・六八七八八三四〇

国際シンポジウム
「子どもたちにとっての未来社会—北欧の思想と実践—」
実施日 三月六日(土)
時間 一時三十分～二時
(開場 一時)
会場 講堂
※参加無料。申込不要。
お問い合わせ
鈴木 紀研究室
電話 〇六・六八七八八三四〇

「関連ワークショップ」
「広がる教育空間—子どもたちのウェルビーイングから考える—」
実施日 三月七日(日)
時間 一〇時～一七時(開場九時三〇分)
会場 第四セミナー室
※参加無料。要申込。
お問い合わせ
鈴木七美研究室
電話 〇六・六八七八八二九〇

公開研究フォーラム
「ヒマラヤ研究と川喜田二郎」
実施日 三月二七日(土)
時間 一四時～一六時三十分

(開場 一時三十分)
会場 第五セミナー室
※参加無料。申込不要。
お問い合わせ
南真木人研究室
電話 〇六・六八七八八二九八

公開ダンスワークショップ
「影で出会う・影でつながる」
実施日 三月二日(日)・祝
時間 一時三十分～一七時
実施日 三月二日(月)・振休
時間 一〇時～一五時
会場 特別展示場
ワークショップの全日程はご自由に見学していただけます。ダンス創作と発表への参加については申込制(無料・定員一五名)となります。
申し込み締切り
三月五日(金)必着
お問い合わせ
情報企画課情報企画係
電話 〇六・六八七八八二二〇
(平日九時～一七時)

●無料観覧日のお知らせ
三月四日(日)は万博公園ふれあいの日にあわせて、常設展を無料で観覧いただけます。
●音楽展示・言語展示を改修しています
期間 三月三日(火)まで(予定)

*詳細については、みんなくホームページをご覧ください。

みんなくゼミナール

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13:30~15:00 (13:00開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料

展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第382回 3月20日(土)
トンガの王様と民主主義

講師 須藤 健一(館長)
王権・貴族制と国民主権・代表民主制とが並存するオセアニアで唯一の王国、トンガ。9世紀に系譜をたどれる王家が社会経済的特権を独占していますが、国王は国民からあつく敬まわれています。この王国で起きている民主化運動とおして、21世紀の島嶼世界に生きる人びとの生活戦略をみていきます。



第383回 4月17日(土)
ことばの宇宙を届けたい—新しい言語展示の表話・裏話—

講師 菊澤 律子(先端人類学研究部准教授)
1人でも多くの人にことばの世界の楽しさを伝えたい。できるだけ多くの人に世界のことばのことを知って欲しい。そんな民博の言語学者の想いが3月末、「言語展示」という形になります。展示の設計のプロセスや装置開発に関するエピソードを、展示場に入りきらなかったことばのおはなしと一緒に紹介します。



友の会

友の会講演会

●大阪と東京で館長講演会を開催
文化人類学に生きる—館長就任1周年を迎えて
講師 須藤健一(館長)

私は文化人類学を新しい学問として学んだ世代です。文化人類学が社会にどのような貢献をしてきたのか、そしてこれから何ができるのかについて、民博設立への流れもふまえて考えてみましょう。

大阪 日時●4月3日(土)14:00~15:30
会場●国立民族学博物館 第5セミナー室
定員●96名(当日先着順。会員証提示)
東京 日時●4月10日(土)14:00~15:30
会場●JICA地球ひろば セミナールーム301
定員●60名(要申込。下記まで)

大阪 第383回 5月1日(土)
一つの列島、二つの国家、三つの文化

講師 佐々木利和(先端人類学研究部教授)
時間●14:00~15:30
会場●国立民族学博物館 第5セミナー室
定員●96名(当日先着順。会員証提示)

東京 第93回 5月22日(土)
東アジアのシルクロード—人びととなく河の道

講師 佐々木史郎(研究戦略センター教授)
時間●14:00~15:30
会場●JICA地球ひろば セミナールーム301
定員●60名(要申込。下記まで)

国立民族学博物館友の会

電話 06-6877-8893 ファックス 06-6878-3716
電話でのお問い合わせは月曜～金曜日9時から17時までをお願いします。
http://www.senri-f.or.jp/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

ミュージアム・ショップ

「春のみんなくフォーラム2010年西アジア再発見」に関連し、引き続きショップでは、トルコ・イラン・パレスチナやエジプトなどの地域から届いたグッズを集め、コーナーを設けています。

チューリップなどトルコの伝統的



トルコ・タイル(1,260円～)、邪視除けのお守り ナザルボンジュク(840円)
トルコ絨毯の模様をあしらったポーチ(630円～)、ニメット工房の小鉢(1,575円～)

な模様が描かれたタイル、古くからある技法をいかしつつも若手アーティストが斬新なデザインを施した色鮮やかな小鉢、そのほか織物、装飾品、ガラス製品に至るまで、見て、使って、触って楽しい品々を数多く取りそろえております。

フォーラムで「再発見」した魅力的な西アジアの世界を、ショップのグッズで自宅へお持ち帰りください。

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
ファックス 06-6876-0875
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/
E-mail shop@senri-f.or.jp

パイワン族の竹占

二〇〇九年の六月から一〇月にかけて、台湾の首都台北にある順益台湾原住民博物館で、「百年來的凝視」という展示会を開催した。民博が収蔵している台湾の原住民に



展示会に出展した呪術用具

関連する資料約二〇〇点を台湾に里帰りさせ、現地の博物館に展示した。

●台湾観光客をも魅了する生活用具
資料は今からおおよそ七、八〇年から一〇〇年前に収集された生活用具が中心。なかには、日本の重要有形民俗文化財に指定されている資料も含まれている。

先方の博物館が来館者のために用意した感想ノートは、中国語だけでなく、日本語、ハングル、英語、フランス語などで埋まっている。台湾の人たちだけでなく、観光で台湾をおとずれた外国人の目にもとまっていたようである。

出展資料は、筆者が民博の収蔵庫をさまよいながら、状態のよいものを中心に選んだ。骨の折れる作業であったが、それ以上にたいへんだったのが、資料の情報収集である。

半世紀以上も前に収集された資料に解説をつけるには、現地の社会や

文化、とりわけ物質文化に精通していなければならぬ。今回は、より正確な情報提供を期すために、収集地が明確な資料を選ぶと同時に、台湾や日本の台

湾原住民研究者によびかけて、出展する資料の情報提供をお願いした。

●五〇年以上も前の呪術用具
そんな資料のひとつに、「呪術用具」が含まれていた。長さ三〇センチメートルたらずの木製の棒で、先端に切れ込みがはいり、ブラシのような輪っかがセツトになっている。

台湾の原住民は、道具を使ったり、鳥のさえずりで判断したりと、吉兆を占うさまざまな方法をもっている。それぞれの民族集団で占いの方法が異なるだけでなく、同じ民族集団でも地域差が見られる。現地名でキサキスとはばれる「呪術用具」は東部パイワン族の居住地で収集されていた。

この資料を調べていただいた研究者は、一竹占は阿美族からの学習によつて取り入れられたものといわれ、男性の専門である。木製の棒状の道具を右足で押さえ、先端部分に、細

く裂いた竹を当てて強く引き、その切れ目の様子で卜占をおこなっていく」と解説されていた。いずれにせよ、半世紀以上も前の資料である。こんな占いは今はしていないだろうと、たかをくくっていた。

●台湾社会に根強く存続する占い

台湾は二〇〇九年の夏、未曾有の水害に見舞われた。集落が丸ごと消失した地域もあり、その多くが原住民の居住地域であった。筆者が調査してきた地域も甚大な被害を受けていた。現地が少し落ち着きを取り戻したところを見計らい、村を訪ねてみた。

そこで、筆者が目にしたのは、まさに台北の博物館で展示しているものと同様の道具を使ったこの占いの様子であった。行方不明になった人を捜すために、祈祷師が件の道具を使って占っていたのであった。同じ資料を台北の博物館で展示していることを伝えても、祈祷師はそれほど関心をしめさず、占いに集中していたことが印象的であった。

彼にとつて占いの道具はあくまで日常の道具であり、長い年月を経て、彼らの社会を見つめ続けてきた道具でもあるのだろう。



ひきさかれた竹ひごの形状を祈祷師がよみとく



足でおさえた棒の先端で竹ひごをひきさく

のばやし あつし
野林厚志
民博文化資源研究センター

人間と動物との関係を歴史的、社会的に考える研究と、台湾原住民の社会や歴史を物質文化を手がかりに考える研究との二足のわらじをはいている。

ラテンアメリカの文書主義

ラテンアメリカへ調査に行くたび、いつも頭を悩まされる問題がある。調査に伴う各種の書類手続きである。

●煩雑な手続き

手続きの種類は多い。出入国関連はもとより、ワールドワークをするなら公的機関や自治組織の許可を得る必要があるし、図書館・文書館を利用するなら利用者証を申請する必要がある。標本資料の収集の場合、手続きはさらに複雑である。通常の輸出入の手続きに加えて、文化財や野生動物植物を管轄する公的機関と交渉し、資料をもち出す許可を得なければならぬ。以前、ボリビアで標本資料を収集したとき、この手続きに一年以上要したことがある。

●ペルーへの出張

昨年からペルーに長期出張しているが、書類手続きはやはり頭痛のたねである。出国の数日前に査証を取得できたのは天恵だったが、その延長手続きに時間がかかり、とうとう有効期限が切れてしまった。受入先の大学から、査証を更新中であることを証明する書類を発行してもらい、事なきを得たが、かなりひやひやさせられた。

図書館・文書館の利用手続きも侮



れない。ある文書館で史料の閲覧許可を求めたところ、必要書類を聞かされて、やる気がなえてしまった。利用許可願、調査計画書、パスポート、公証人が認証したそのコピー、所属機関からの紹介状、日本大使館からの紹介状、云々。大使館から一筆をえるだけでも、長期間の事前準備と書類の束と粘り強い交渉が必要となるだろう。

●文書主義とその抜け道

事実確認や意思決定、通達や指令などを文書を介しておこなおうとする姿勢を、社会学では文書主義とよぶ。本来、作業の効率と精度を高め、公平さを確保するための措置なのだ。自己目的化し、繁文縟礼に墮する危険がある。ラテンアメリカの公

的機関はこの文書主義にとりつかれているように思われるが、にもかかわらず日々の業務が進むのは、抜け道があるからである。書類へのこだわりは、じつはその軽視と対になっている。書類はたしかに必要なだが、それがなければお手上げというわけではない。交渉次第で道は開けるのである。やり方はさまざまだが、コネとカネがもつとも重要である。今回の出張でも、査証が取得できたのは、有力なコネのおかげである。

●文書とのつきあい方

文書を迂回する抜け道が増えれば、その対抗策として、文書主義は強化されるだろう。そうすれば、文書を介した公的ルートはいっそう険しくなり、抜け道の必要性はさらに高まるだろう。人間と文書のこのイタチごっこは、歴史を振り返れば、ラテンアメリカに限らず、地球上のいたるところで繰り返されてきたものではあるまいか。その出現以来、文書は人間に大きな利益をもたらしてきたが、その文書と上手につきあうことは、じつはたやすいことではない。

査証がようやく更新されて手元に戻ってきたパスポートを見ながら、そんなことを考えさせられた。



ペルーの首都リマ



査証の更新に関する書類

さいとう あきら
齋藤 晃

民博 先端人類科学研究部

平成二六年から二〇年にかけて機関研究「テキストの構築」を実施し、人間と文書の関係を学際的に究明した。現在、その成果をとりまとめ中。

多文化を	ささえ	人びと
ささえ	え	と
と		

自助組織としての自立をめざして NGOベトナムin KOBE

一九九五年神戸を中心とする大震災のあと、数年たち、いくつかの外国人支援組織からベトナム人の自助組織が生まれた。NGOベトナムin KOBEである。「コミュニティとのつながりが薄れはじめた今、若いコミュニティ出身メンバーの出現にあらたな活動の可能性が見えはじめた」

「ああ、また昼過ぎまで延びた。今日は何時に終わるんやろ、このミーティング」。NGOベトナムin KOBE（以下、NGOベトナム）がいつも土曜に開くスタッフミーティング風景だ。わたしがこの団体のスタッフになって六年、代表のハ・ティ・タン・ガさん（以下、ガさん）について古いメンバーの一人である。

ガさんのストーリー

一九九五年一月一七日の阪神・淡路大震災は神戸長田区に住んでいた多数のベトナム人にも多大な被害をおよぼした。家族とともにそこに暮らしていたガさんもそのような一人であった。カトリック信者であるガさんは、ボランティアとしてカトリック鷹取教会（現在はカトリックたかとり教会）でベトナム料理の炊き出しの支援をしていたが、ある日、日本人から、ベトナム料理の講師を



「ベトナム旧正月を祝うつどい」での母語教室の子どもによる伝統楽器の演奏(2005年)

おこなっている。Dさんは隔月に一回発行しているニュースレター「NGOヴィエト」の編集の取りまとめと会計業務、Eさんは、おもにベトナム語翻訳を担当する。そして、わたしはベトナム人の親を持つ子どもたちのための母語教室（毎週土曜日開催）の管理・運営を任されている。わたしを含めた四人はベトナムでの語学留学経験がある日本人である。運用能力の差があるが、スタッフはすべてベトナム語ができる。また、日本人スタッフのほとんどが在日ベ

頼まれた。日本人のベトナムへの関心が高いことが意外であった。「ベトナムのことなら、わたしでも伝えられるかもしれない」。それが社会活動をはじめのきっかけとなった。

九七年二月、ガさんは神戸定住外国人支援センター（KFC）の立ち上げスタッフとして要請された。KFCは被災ベトナム人救援連絡会と兵庫県定住外国人生活復興センターというふたつの団体が統合されてできたものである。双方とも、震災後、行政などの被災者向けの支援情報を外国人、特にベトナム人にむけて加工し発信していた。震災後の混乱が落ち着いてきたころ、それらがKFCとして統合されたのだ。

彼女がKFCで担当した仕事はじつに多彩だった。ベトナム人への避難所・テント村での支援、ベトナム語による情報提供、行政との折衝、生活相談など、すべてがガさんに



ベトナム人高齢者のための社会見学

ベトナム人関連の研究に携わってきた。調査のフィールドワークのためにNGOベトナムにかかわりスタッフになった、つまりミイラ取りがミイラになったわけである。

「自助組織」が抱える問題

順調に進んでいるかにみえるNGOベトナムも課題はないわけではない。じつは、支援活動も長年継続すると緊張感がうすれるためか、在日ベトナム人コミュニティのニーズに合っているのか、コミュニティとかわりが保たれているかなどの面でも、ややもするとおろそかになりがちである。わたしの担当分野でいえば、母語教室の活動にベトナム人の関心が向いているのか、教室に子どもを通わせようとする保護者への働きか



カトリックたかとり教会の中庭

とつては未知の経験だったが、無我夢中で取り組んだ。

KFCが発足して約四年後、ベトナム人支援部門が独立することに なった。NGOベトナムである。「自分たちのことは自分たちの力で解決したい」。日本に定住しはじめて二〇年をへて、地域の在日ベトナム

けが十分できているのか、生徒数の伸び悩みも気になる。

上述のようにNGOベトナムはそもそも自助組織として誕生した。NGOベトナムが発足して、今年一〇年目を迎え、事務所の活動、スタッフの数は発足当時の何倍にも膨らんだ。しかし、増加するコミュニティの構成員の数とその多様性や複雑化する問題を吸い上げ、世代間ギャップなどに対応するには、まだまだ当事者であるベトナム人のかかわりが必要である。長田区に住むベトナム人の数は徐々に増え続け、現在八三四人、神戸市では一四三八人（二〇〇九年一二月現在）に上る。

このような停滞はNGOベトナムにかぎったことではなく、また日本にかぎったことでもなく、一定の定住

きたやま なつき
北山 夏季

甲南女子大学 非常勤講師

言語文化学専攻。大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程単位取得。神戸市の公立小学校のベトナム母語教室講師を担当。最近の関心事は、在日ベトナム人の母語教育と同じく在日ベトナム人仏教徒コミュニティの動向。

ム人たちの自助の意識が形となった。発足当時は、たかとり教会のベトナム人神父が代表を務めたが、神父の移動により事務局長のガさんがそのあとを引き継いだ。ガさんは代表として、組織の事業を取りまとめ、一方で、進んで在日ベトナム人の生活相談にのり、各地で在日ベトナム人について講演をしたりしてきた。

わたしたち、スタッフの作業

ここで七人のスタッフの担当を通してNGOベトナムの多彩な活動を紹介します。まず、Aさんは在日ベトナム人高齢者のための訪問型健康相談、薬物防止キャンペーンを担当する。Bさんは「ベトナム図書館」とよばれる何百冊にも上るベトナム語図書と年一回開催するベトナム文化理解講座の企画実行の担当である。Cさんは日本語教室（毎週日曜開催）の運営と管理をおもに

期間をへた移民コミュニティ支援組織によくあることのようにだ。NGOベトナムもある意味で成熟するためひとつの山を乗り越える時期にきているのだろうか。

とはいえ、明るい兆しもみえつつある。日本で生まれ、あるいは幼少時代から日本でそだった、ベトナムを知らない世代がNGOベトナムやたかとり教会を中心とするコミュニティ活動に進んで興味を示し、かわりは始めている。いずれ彼らのなかから、積極的にスタッフとして加わる人もでてくるだろう。ベトナム人コミュニティの発展のために、ベトナム人が住みやすい社会づくりのために。それこそNGOベトナムの自助活動のひとつの成果として、ひそかに心待ちにしている。

NGOベトナムのニュースレター「NGOヴィエトニュース」



事務所内の「ベトナム図書館」

羊たちのいる イタリアの風景 〈ヒツジ〉

イタリアの食卓とファッションを支えてきたヒツジ。
山の斜面でゆったりと草をはむヒツジたちにも、イタリア農業の危機が迫っている



クリスマス、家々に飾られるプレセピオとよばれる人形セット。イエスが誕生した馬小屋の様子を再現したもののだが、ここでも羊飼いやヒツジは必須だ



村の共有地で放牧されるヒツジ(サルデーニャ)〈撮影・井本恭子〉

地へと移動するといふ季節的な移牧がおこなわれている。このため、ヒツジがいる風景は、イタリア人にとっては、どこに住んでいてもなじみのものだ。

「地」の家畜

『地中海世界』という大著のなかでも一節が割かれているように、イタリアのみならず地中海地域の特徴のひとつである。地中海地域では、地中海性気候による夏の乾燥に耐えるオリブとブドウ、冬の降雨を利用して栽培される小麦が「三大作物」とされるが、さらに、山地と低地間の垂直移動によってこの気候に適応したヒツジの移牧を組み合わせた混合



農業が発達してきた。

すなわちヒツジは、イタリアの自然環境や生業と密接にかかわってきた家畜であり、人びとは長いあいだその毛を織物とし、肉を食べ、乳はチーズに加工して利用してきたのである。なかでも羊毛は、中世になると繊維業が発達し、アルテとよばれる同業組合ができてルネサンス繁栄期をもたらすなど、イタリアの歴史にも大きく関与した。現在、世界的にも有名なイタリアの繊維産業の土台はここにある。



町の祭りで、特産のリコッタを振る舞う羊飼いたち。大きな鍋で加熱されているのがリコッタだ(ローマ近郊)

羊飼いや子羊の解体。近くにいる犬は、牧羊犬(ローマ近郊)

ローマ周辺の家庭料理であるニョッキ(ジャガイモ入りパスタ)には、ペコリーノ・チーズがかけられるのが定番



塩辛さと濃厚さがとくに田舎風の家庭料理に合うとされている。どの家でも、パスタに振りかけるチーズのひとつとして、パルミジャーノな

食卓を彩る羊乳チーズ

とはいえ、その時期すでに羊毛はイギリスなどからの輸入に頼るようになっており、イタリアで飼育されるヒツジは、今でも大半は肉用・乳用である。実際、一般の人びとにとってヒツジといえば、まずは食卓と結びついている。

イタリアでもチーズは牛乳製であることが多いが、ペコリーノ(ヒツジはイタリア語でペーコラ)とよばれるヒツジの乳のチーズは、独特の

どの牛乳製チーズとともに常備され使い分けられている。日本ではなじみがないかもしれないが、ペコリーノを作る工程でできる乳清を再加熱して固めたリコッタ(再度加熱するという意味)という

ケーキに混ぜあわせたりしても使われるが、熟成させるペコリーノとは違って新鮮さが命でもある。このためリコッタの好きな人は、知り合いの羊飼いに直接予約をしたり、毎朝出来あがりを持ち構えて店に買いに行ったりする。でも、店の人から、「今日は乳があまり出なかつたらしくて、リコッタの仕入れはないよ」と告げられてがっかりする姿もよく見かけた。

一方、肉として食されるのは、ほとんどが一歳以下の子羊(オス)である。とりわけ生後数カ月で離乳前の子羊の肉はアバッキョとよばれ、その柔らかさやゆえ好まれる。ただし、ほかの肉に比べると、羊肉は、今でも復活祭や結婚式などの祝祭用の肉とみなされる傾向が強い。

とくに復活祭は、もともと子羊をほふるユダヤ教の「過ぎ越しの祭」との関連が深いせい、イタリアでも子羊料理が定番になっており、地域ごとに独自の調理法がある。復活祭の前、肉屋に子羊の肉が丸ごと吊るされるはじめる春の訪れを感じるというひとと少なくない。

ヒツジたちに忍び寄る危機

現在、イタリアのヒツジは食用であっても、農業全般の衰退・不振とともに頭数が減少している。羊飼いたちも高齢化し、ヒツジの牧畜自体

うだがわ たえこ 宇田川 妙子

おもにローマ周辺で調査をしてきたが、最近北部のトレント市での調査を通してイタリアの地域的な多様性を目的に当たり、あらためてイタリアという国を考え直している。

民博 先端人類科学研究部

が危機にあるといわれている。このため最近では、農業や田舎生活を体験するエコツーリズムやアグリツーリズムのブームに便乗して、羊飼いと一緒の山歩き体験やチーズ作り体験などを企画して観光業と結びつけたり、伝統的なチーズ作りを復活・改良して特産品として売り出したりする工夫もなされているが、そう簡単ではない。

ヒツジ *Ovis aries* 脊椎動物門哺乳綱ウシ目ウシ科ヤギ亜科ヒツジ属の動物。代表的な品種であるメリノ種のように羊毛のために飼育されることが多いが、肉や乳用もある。山岳地帯や砂漠など、さまざまな環境に適応した固有種も多く、角の付き方や色にも多様性が大きい。ヒツジの家畜化には、群れて先導者に従いやすく、危険を察知すると逃げるといった性格を利用した。多くの場合は羊飼いが牧羊犬を用いながら群れを動かすという方法がとられている。

山岳地でもエコツーリズムのため標識などが整備されるようになった(サルデーニャ)〈撮影・井本恭子〉



歳時 世相篇

24

ノウルーズ イランの新年

「太陰暦」であるヒジュラ暦は、地球が太陽を回る周期とのズレを閏月をもうけて補正しないことから、1年間は354日となり、グレゴリオ暦とずれることになる。ちなみに、西暦2010年は、12月7日にヒジュラ暦の1432年の新年を迎える。ところがイランでは、同じヒジュラを元年としながらも、3月21日を元日とする太陽暦がおもに用いられている。新しい年を迎える行事は春分の日の前後に賑やかにおこなわれる



やまなか ゆりこ
山中由里子

民博 民族文化研究所

専門は比較文学比較文化。アレクサンドロス大王の死後に彼にまつわるさまざまな言説が、古代ギリシア・ローマ世界からイスラーム世界へどのように伝わり、展開したかを研究している。著書に『アレクサンドロス変相―古代から中世イスラームへ』（名古屋大学出版会、二〇〇九年）

中東諸国では、六二二年ヒジュラ（ムハンマドのメッカからメダイナへの移住）を紀元とする太陰暦「ヒジュラ暦」が、ムスリムの生活を律する。太陰暦なので、暦は太陽の動き、つまり季節とは対応していない。これに対してイランでは、このヒジュラを元年とし、春分の日を元日とする太陽暦、「太陽ヒジュラ暦」が中心に用いられている。西暦の三月二一日にあたる春分の日は、イランでは「ファルヴァルデーイン月一日」になり、この元日のことを「ノウルーズ」（新しい日）とよぶ。イランはイスラーム教国ではあるが、イスラーム暦の新年よりもノウルーズの方が重要であり、イスラーム以前に遡るのではないかとされるさまざまな風習や行事がみられる。

縁起物で迎えるお正月

まずノウルーズの二週間ほど前になると、ハッジ・フィールーズとよ

生を象徴する。金魚は命をあらわす。この時期になると街角にあらわれる金魚屋さんで、見栄えのいい赤い金魚を選ぶのは、ヨーロッパの人が、クリスマス前に生のモミの木を、森や特設の市場に調達しにゆくのとどこか似ているかもしれない。金魚にしても、青草にしてもプラスチックのイミテーションではまったく意味がないのである。

無病息災を願う

「赤い水曜日」

年末最後の水曜日の前夜には、焚き火の上を飛び越えて無病息災を願う「チャハールシャンベ・スーリー」（赤い水曜日）がある。一五年前前ノウルーズのころにイスファハーンに滞在したことがあり、このチャハールシャンベ・スーリーのパーティーと呼ばれたことがあった。郊外の知り合いの知り合いの家というところにつくと、公の場では隔離されている若い男女が、わきあいあいと一緒に踊っており、女性はヴェールをしていない。裏庭では焚き火が勢いよく燃えている。それもひとつではなく、三つも四つも並んでいる。

男たちは燃え盛る炎の真上を豪快に飛び、調子にのってさらにガソリンをかけたりにしている。わたしは怖いので、端の方をちよろっと申し訳程度に飛んだ。飛ぶときは「わたし



イスファハーン、イマーム広場に飾られたハフト・スィーン

の黄色をあなたへ、あなたの赤をわたしに」と言わなければならぬ。黄色は病や災いであり、赤は健康と幸運を象徴する。自分のなかにある悪いものは炎に託し、火をもって厄を浄化し、次の年を幸せに生きるためのパワーをもらおう、という儀式である。

今は合法化されているらしいが、当時はこの焚き火が「イスラーム的でない」という理由で禁止されていた

ばれる、赤い帽子をかぶって顔を黒く塗った人が歌い踊りながら町を練り歩く。新年がもうすぐそこにきていることを告げるこの「正月おじさん」が登場すると、人びとは年末の大掃除や「ハフト・スィーン」（七つのS）とよばれるお飾りの準備、年賀カード書きなどで大忙しになる。ハフト・スィーンのお飾りの準備は、通常女性の役目である。頭文字が「スィーン」（Sの音）の縁起物

たので、家の戸口と通りの角には、取締りが来ないか見張っている人がいたらしい。「来たぞー」という誤報で、蜂の巣をつついたように一瞬みなが大騒ぎをし、女たちが慌てて頭にヴェールをかぶった覚えがある。

ピクニックを楽しむ

「戸外の二三」

一連の新年行事の締めくくりは、ノウルーズ二三日目、家族や友人と

を七つ並べるのであるが、何を置くかは家庭によって微妙に違う。スイープ（リングゴ）、スイール（ニンニク）、セルケ（酢）、セツケ（コイン）、サマク（魚）、サブゼ（青草）は、大体どこの家庭でもはずせないアイテムであるが、そこにサマヌー（ペーセント状の麦芽のお菓子）、ソマীগ（薬味の一種）、センジエド

（グミの実、ソンボル（ヒアシンスの花）などが加わる。スィーンが頭文字ではない鏡、ろうそく、色をつけた卵、詩集やクルアーン（コーラン）などが置かれることもある。数の子が子孫繁栄、黒豆が魔除けと勤勉といったように、日本のおせちに含まれる料理が縁起物であるように、ハフト・スィーンのお飾り物のひとつひとつにも意味がある。

例えば青草は、大麦などの種を盆の上で発芽させたもので、生命の再

連れ立って公園や郊外にピクニックに出かける「スィーズダ・ベ・ダール」（戸外の二三）である。ハフト・スィーンに飾ってあった青草は、この日、川に流す。川辺の草の上で人びとは食事をし、歌い、踊り、詩を朗詠し、バックギャモンなどを楽しむ。お酒はご法度なので、日本の花見のように公衆に迷惑をかけるよっぽらいもない。わたしがスィーズダ・ベ・ダルを過ごしたイスファハーンの郊外、アーモンドの花が咲きほころぶ谷は、まさに桃源郷の風景であった。

民博でノウルーズ

民博では三月二〇日と三月二一日ノウルーズにまつわるイランの絵本の読み聞かせをする。このイベントの際にハフト・スィーンを飾れないものかと、現在画策中である。もちろん、生きた金魚と青草を使って。また、スィーズダ・ベ・ダルにはちよつと早いですが、三月二八日には、エントランスホールで目下製作中のじゅうたんを仕上げ、それをもってピクニックに出る予定である。じゅうたん織に参加した来館者には、このピクニック参加券を差し上げているので、火・木・土・日・祝日にぜひ一度織りにいらしていただきたい。桜も咲き始めていることである。

「いのち」が育まれる場所

ラオス低地農村部の水田。
人びとの主食であるモチ米を育て、そこに育つ動植物が日々の食卓を彩る。
さまざまないのちが育まれ、それらが糧となり人びとのいのちを育む。
だが、もつひと育まれる「いのち」があるという

ラオス低地農村部の水田

雨季のあいまの透き通った空。青々と稲が茂る水田。

ラオスの中南部、サワンナケート県の低地農村部でわたしは二年ほど調査をしていた。空の青と水田の緑との鮮やかなコントラストは、深く印象に残るラオスの風景のひとつである。

ラオス低地農村部の生活の中心には水田稲作があり、ほとんどの人が水田稲作を営んでいる。この水田で育てられるのは、ウルチ米ではなく、モチ米である。これが彼らの主食となる。

ラオスは、雨季と乾季とがはっきりと分かれる熱帯モンスーン気候に属する。山地では焼畑耕作もみられるが、わたしが調査をしていた低地農村部では、雨季の天水を用いた水田稲作が一般的である。

雨季の訪れる五月前後から田起こしや苗床作りをはじめ、雨が十分に降って田んぼに水がたまれば田植えをする。除草などをしながら稲の成長を見守り、一二月頃、雨季が終わりや告げると実りの季節を迎え、稲刈りをする。近年になり灌漑が整備



ラオス低地農村部の水田。田んぼのあいまに樹木が立っている

され、乾季でも稲作をおこなうこともできるが、それでも雨季の天水を利用した稲作が中心である。

水田は、主食となるモチ米を育てる重要な場所である。しかし、そこから得られるのは米だけではない。ラオスの水田にはところどころに樹木が残されているが、そこには果実がなり、木の上には鳥が巣をつくり、その根元にはコオロギなどの昆虫が棲みつく。畦には食用・薬用のさまざまな草が競うように生い茂り、ヘビやトカゲ、ネズミなどが棲んでいる。水を張った水田や水路には、ナマズやウナギなどの魚、カエル、カニ、水棲の昆虫が生息する。

ラオスにおいて水田とは稲作だけでなく、漁撈をはじめ、草木や果実の採集、昆虫の採集、野鳥などの狩猟の場ともなる。主食となるモチ米のほかに、漁撈や狩猟採集を通じてえられる動植物が副食として日々の食

卓を彩る。さまざまないのちが育まれ、それらが日々の糧となり、人びとのいのちを育む。ラオスの水田は、いのちの豊かさを湛える場所なのだ。

水田で育まれるもつひの「いのち」

ラオス低地農村部に暮らし、その水田の豊かさに感銘を受けたわたしは、そのことを誰かに話したくたしうがなかった。そんなある日、村の男衆の酒盛りに誘われた。チャ



田植えをする若い夫婦



乾季の水田でカエルをとる子どもたち。乾季の水田でも狩猟や採集活動がおこなわれる

ンス到来である。

ラオ・ラーオとよばれるモチ米の焼酎を飲みながら、ほどよく酔いのまわったわたしは、ラオスの水田がどれだけ豊かないのちを育み、それがまた日々の糧になっているかについて話した。周りの男衆は、彼らにとっては当たり前であろう話に気持ちよく相槌を打ってくれる。

「そうだそうだ、俺たちはそうやって生きていくんだ！」
気分よく一通り話を終えたところで、一人の男がニヤニヤしながら、含みをもたせながらこう言った。

「もうひとつ、育んでいる『いのち』があるぞ、わかるかいワシヤ(君佐)?」

周りの男衆は「まってました!」とばかりに盛り上がる。あれこれと答えてみたが、「違ふ」と一蹴される。見当もつかず考え込んでいると、別の男が説明をはじめた。

ラオス低地農村部では一般的に、新婚夫婦はしばらく親の家に同居し、その後新居を建てて独立するという手続きをふむ。同居するのは妻方の生家の場合が多いが、夫方の生家となることもある。い



作業小屋、ティアン・ナー

総出で作業にあたる。毎日水田まで通うのはたいへんなので、水田の近くに作業小屋を建て、そこに住み込んで農作業をする。だが、田植えや稲刈りなどの人手が必要な時期以外は、それほど人手を必要としない。そのため、家族の中心的な働き手以外の者は、必要

ずれにせよ子ども夫婦と同居することになった親は、自宅に彼らの寝室をしつらえる。裕福な家であれば個室を用意するが、多くの場合は、家族共有の寝室の一面を板や布などで仕切るだけである。

新郎新婦にとって、これは少々困ったことになる。そう、「夜の営み」に差し支えがあるのだ。もちろん寝室の一面でも営めないわけではないが、やはり家族の目(耳?)が気になるという。では、どうするか。ここで登場するのが、水田の近くに建てられた作業小屋(ティアン・ナー)である。

多くの世帯が、自宅から一、二キロメートルほど離れた場所に水田を有している。農繁期には、農作業をリタイアした年配の者や学校に通う子どもを残し、働き手となる家族が



結婚式の風景。家族や親族を中心に多くの人びとが祝福に訪れる

に応じて自宅から水田に通う。家族で一番の働き手は誰かといえば、世代でいえば二〇代から三〇代である。そう、作業小屋に残る者として若い夫婦はぴったりなのだ。

ここまで一気に話し終え、男は話を止めた。男衆は意味ありげな顔でわたしを見ながら、笑いだした。しばらくして、わたしも思わず笑いだしてしまった。なるほどなるほど、そういうことか。雨季の作業小屋は、プライベートな時間と場所を確保するのにもってこいということか。稲を育てるだけでなく、さまざまな動植物が育つだけでもなく、人の生命が育まれる場所でもあるのだ。ラオスの水田は、わたしが思っていた以上に、いのちの豊かさを湛えた場所であった。

いわさ みつひろ
岩佐 光広
民博 機関研究員

専門は医療人類学、生命倫理学。高齢者ケアや終末期ケアに関心があがる。ラオスでの調査を継続しつつ、現在は日本に定住するラオス難民の調査も進めている。



編集後記

今からちょうど40年前の3月14日、千里丘陵で大阪万博が開幕した。その40周年を記念し、当時のパビリオンホステスのユニフォームが復元されるという。リニューアルされる鉄鋼館も「EXPO'70パビリオン」としてよみがえり、厳選された20着のユニフォームもそこでお披露目される。複製にあたってもっともモノをいったのは保存されていた実物資料である。もちろん当時の解説資料や写真なども参考になったし、デザイナーのコシノジユコさんなども確認作業に立ち会っている。このように資料の保存と技術伝承者の存在はミュージアムにとってかけがえのない価値をもっている。

他方、世界中から収集された大阪万博の民族資料はそのほとんどが民博に移管され、ひとつのまとまったコレクションとして保存されている。展示場にも多数活用されているが、それを上まわるコレクションが本号で特集したアチック・ミュージアム以来の標本資料である。このふたつのコレクションのおかげで、民博は創設のレゾナントル(存在価値)を確保したといっても過言ではない。(中牧弘允)

次号の予告

みんなくインタビュー

辻 信一

月刊みんなく 2010年3月号

第34巻第3号通巻第390号 2010年3月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎 庄司博史

中牧弘允 信田敏宏 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 京都通信社

印刷 市蔵図書

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

●予定時間 14時30分から15時30分(予定)。

●常設展示場観覧料が必要です。

*都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館(みんなく)の研究者が、来館された皆様の前に登場します!

「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別!

どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしています。

3月の開催

3月7日(日)

話者: 笹原亮二(民族文化研究部准教授)

話題: オニはオニ?—奥三河の花まつりを巡って—

場所: 常設展示場内

3月21日(日)

話者: 出口正之(文化資源研究センター教授)

話題: 民博とボランティア

場所: 展示場内休憩所

3月28日(日)

話者: 佐々木利和(先端人類科学研究部教授)

話題: チセのはなし

場所: アイヌの文化展示

1年間みんなくに何度でも入館できる

「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

常設展は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆常設展の無料入館◆特別展の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

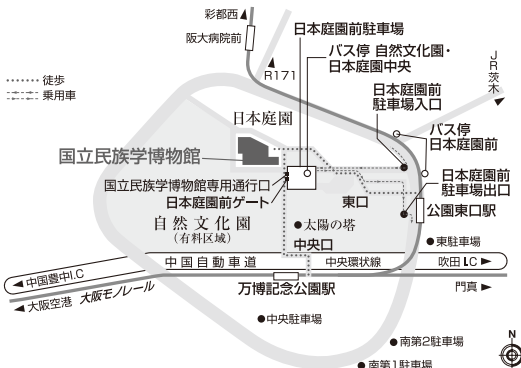
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話06-6877-8893/平日9:00~17:00)

訂正とお詫び

「月刊みんなく」2010年2月号22ページ「フィールドで考える」に掲載の地図に誤りがありました。赤道を、実際よりも約556km(地図上では約5mm)北に表示しています。謹んでお詫びし訂正いたします。



交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。

●家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

